

縄文時代草創期における狩猟具の変遷

-東海・近畿地方と信越地方の比較から-

田中 良

東海・近畿地方では出土資料の制約もあり、草創期の編年研究があまりおこなわれて来なかつた。本論文はそうした中で、遺物の豊富な信越地方との比較から東海・近畿地方の編年を試案した。その結果、東海・近畿地方の草創期の一端を垣間見ることができた。また、それまであまり議論されてこなかつた新旧関係以外の文化的な要素も明らかにすることができた。

1. これまでの検討

東海地方や近畿地方は縄文時代草創期の遺跡が関東地方などに比べて圧倒的に少ない。また、出土事例の大半が単独出土や表面採取である。これが要因で、東海地方と近畿地方の編年研究があまり進められてこなかつた。層位や出土事例に恵まれた関東地方や信越地方、洞窟遺跡に恵まれた四国や九州地方では、先人たちにより、編年研究が盛んに行われてきた。東海地方や近畿地方でも資料が蓄積してたため、2000年代に入って、編年研究が少しずつ活発になってきた。しかし、遺跡の多くが隆線文土器期に偏るため、編年の多くがこの時期の細分に留まっている。この現状を踏まえ、従来の編年研究を見つめ直す意味で、少し違った角度から東海・近畿地方の草創期を概観し、編年を試案してみたいと思う。

2. 研究史概観

縄文時代草創期の研究は縄文時代の始まりを探る研究と後期旧石器時代の終わりを探る研究から始まった。前者では山内清男・佐藤達夫氏らの縄文土器の起源を探る研究である。後者は芹沢長介氏の石器から旧石器時代の終末を探る研究である。この両者による研究が、1956年に発掘調査された新潟県本ノ木遺跡によって激しく対立し、その後の草創期研究の枠組みを築く事になる(芹沢1962、山内・佐藤1962など)。このいわゆる「本ノ木論争」は発掘から60年

を経た今でも、土器と石器が共伴するのかなど解決していない。近年刊行された、『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流－研究の視点－』(白石編 2018)では、岡本東三氏が本ノ木遺跡について石器と土器、双方の検討から編年的位置付けを模索しているが、未だ解決には至っていない(岡本 2018)。しかし、安易に石器と土器を分離させず、双方から検討する視点は、重要であろう。遺物分布を見る限り、共伴するには明らかなだから。

本ノ木遺跡以外にも論争に発展する重要な遺跡が、長野県神子柴遺跡と青森県長者久保遺跡である。これらの遺跡から出土した木葉形尖頭器や局部磨製石斧、石刃は異質で、多くの研究者に注目されることとなる。長野県神子柴遺跡は1958年に林茂樹・藤沢宗平氏により発掘された(林・藤沢 1961)。青森県長者久保遺跡は1962年に山内清男・佐藤達夫氏により発掘された(山内・佐藤 1967)。これらの遺跡では、長大な木葉形尖頭器や局部磨製石斧、石刃が出土する。また、青森県大平山元I遺跡、茨城県後野遺跡、神奈川県寺尾遺跡など土器を伴う遺跡も存在する。そして、これら特徴的な石器をもつ文化をはじめて体系化し、「神子柴系文化」と呼称したのが森嶋 稔氏である。森嶋氏は後期旧石器時代から縄文時代初頭に及ぶ神子柴型石斧が伴う一系列の文化を「神子柴系文化」とし、神子柴遺跡に代表される大型石斧や大型尖頭器を「神子柴型石斧」「神子柴型尖頭器」と呼称した(森嶋 1967、1968)。そして、神子柴型石斧の小形化・狭長化という型式的変化を捉え、編年を行つた(森嶋 1970)。その後、

全国の神子柴型石斧を集成・分類し、それに伴う石器群から編年を試みた岡本東三氏（岡本 1979）や長者久保遺跡と神子柴遺跡の石器群の差を時期差として捉え、具体的な編年案を提示した栗島義明氏の研究（栗島 1988）などこれを機に、草創期の編年研究が活発化する。

神子柴・長者久保文化と同様、草創期に特徴的な石器として有舌尖頭器がある。有舌尖頭器は、小林達雄によって注目されるようになる（小林 1962）。その後、芹沢氏が中林遺跡の報告書の中で、全国的な体系化した（芹沢前掲）。芹沢氏の視点は、土器の有無、大形→小形へ、小形化の延長に石鏃への変化を捉える、舌部形態の明瞭化である。

1970 年代以降、当該期の発掘事例が増加し、関東地方の層位的出土事例などを元にした、全国的な編年が試案されるようになる（栗島 1988、岡本前掲、白石 1976）。その後、資料の蓄積がなされると、関東地方や信越地方では、全国編年を地方あるいは地域単位でより細かく編年する地域編年が試案されるようになる。そうした中、東海・近畿地方では、『日本の旧石器文化』で、この地方の編年が安達厚三氏によって初めて考案された（安達 1975）。その後、発掘調査による層位的事例が乏しいながらも、増子康眞・久野敏幸・荒川弘道氏らや松田真一氏により、この地方の編年研究が行われるようになる（増子・久野・荒川 1987、松田 1998）。これらの研究から、有舌尖頭器や石鏃を中心とした、編年研究がおこなわれるようになる（川合 2002、田部 2013 など）。

以上、草創期の研究史を少し振り返ってみたが、発掘事例が豊富な東日本では地域編年など細分された編年が盛んなようである。その一方、発掘事例に乏しい東海・近畿地方では、あまり地域を細別できず、有舌尖頭器など特定器種の型式学的变化を細別するにとどまっている。特に問題なのが、資料的な偏りから、隆線文土器段階の細別に傾斜し、草創期全体の流れを読み取るような地方編年があまりおこなわれていない点が、東海・近畿地方の編年の限界を物語っている。

こうした現状を打破しようと試みたのが、本論の趣旨である。今回は、当地方における草創期の時代の流れの一端を狩猟具の変化から掴んでみたい。

3. 狩猟具の分析

今回分析対象とする範囲は信越地方と東海・近畿地方である。遺跡の内訳は、信越地方 13 遺跡（長野県 7 遺跡、新潟県 6 遺跡）、東海・近畿地方 19（静岡県 4 遺跡、愛知県 5 遺跡、岐阜県 4 遺跡、三重県 2 遺跡、奈良県 3 遺跡、兵庫県 1 遺跡）遺跡である。主な出土遺物については、それぞれ表にまとめた通りである（表 1、表 2）。

狩猟具とは木葉形尖頭器・有舌尖頭器・石鏃の 3 器種である。これらの分類基準は、木葉形尖頭器は最大幅が器体中央から基部にかけてあり、平面形が木葉形となる A 類と、最大幅が器体中央から先端にかけてあり、両側縁がほぼ直線状に伸び、平面形が柳葉形となる B 類の 2 類型に分類する。また、10cm 以上のものをそれぞれ Aa、Ba 類（大型）、10cm ~ 5cm のものを Ab、Bb 類（中型）、5cm 以下のものを Ac、Bc 類とする。

有舌尖頭器はその舌部形状から舌部と身部の区別が不明瞭な V 字と舌部に逆刺を持つ T 字に大きく分類する。また、10cm 以上のものをそれぞれ Va、Ta 類、10cm ~ 5cm のものを Vb、Tb 類、5cm 以下のものを Vc、Tc 類とする。

石鏃は基部が平らなものを平基式、基部が抉れているものを凹基式に大きく分類し、5cm 以上のものを平基式 a、凹基式 a 類、5cm ~ 2cm のものを平基式 b、凹基式 b 類、2cm 未満のものを平基式 c、凹基式 c 類とする。また、有茎のものは全て有舌尖頭器として扱う。

a. 信越地方

信越地方では、神子柴段階から多縄文土器段階まで遺跡が各時期に存在する。その内、今回対象とした遺跡と主な出土遺物については、表 1 の通りである。

各遺跡の主体となる狩猟具の長さと幅の平

表1 信越地方の遺跡と主な出土遺物

遺跡名	器種	木葉形 尖頭器	有舌 尖頭器	石鏃	搔器	削器	石斧	土器
池の平	○							
唐沢B	○			△	○	○		
仲町	○	○	○	○	○	○	○	隆線、爪形 円孔
星光山荘B	○	○	△	○	○	○	○	隆線
下茂内	○			△	○			
神子柴	○			○	○	○	○	
卯ノ木	○		○	○	○	○	△	爪形、押圧
小瀬が沢	○	○	○	○	○	○	○	隆線、爪形 押圧
中林	○	○		△	○			
本ノ木	○		△	○	○	○	○	爪形、押圧
久保寺南	○			○	○	○	△	隆線
室谷		△	○	△	○	○	○	押圧、回転

○ 5点以上、○ 5~3点、△ 2~1点

3

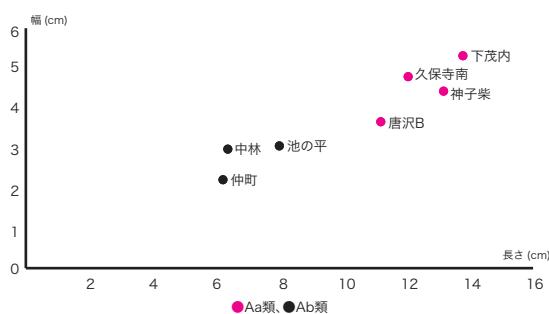


図1 A類の長さと幅の平均値

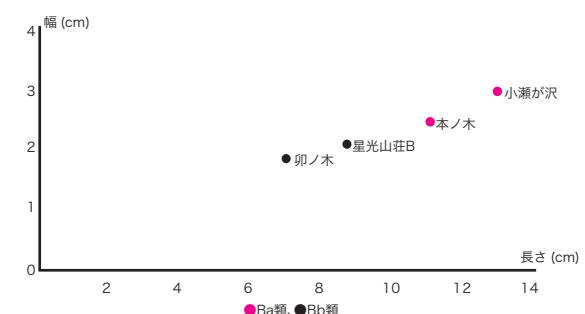


図2 B類の長さと幅の平均値

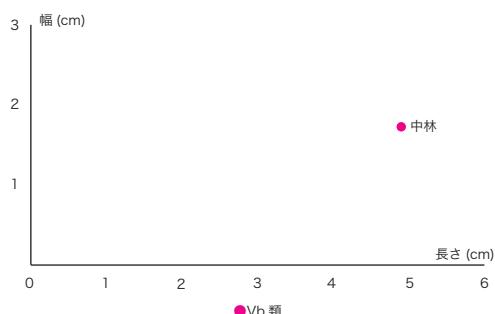


図3 V類の長さと幅の平均値

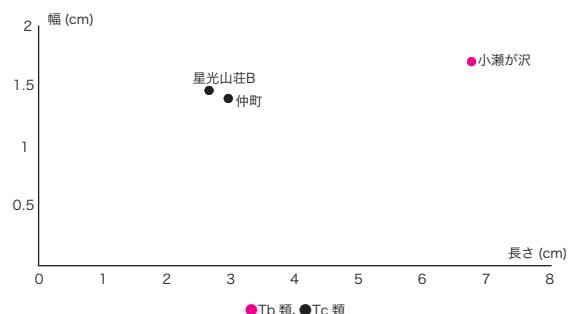


図4 T類の長さと幅の平均値

均値はグラフに示した通りである（図1～4）。遺跡ごとに整理すると、Aa類を主体とした遺跡は唐沢B、久保寺南、下茂内、神子柴であり、Ab類は池の平、中林、仲町である。中林はVb類、仲町ではTc類と凹基式b類も組成する。Ba類を主体とした遺跡は、小瀬が沢、本ノ木で、Bb類は卯ノ木、星光山荘Bである。また、小瀬が沢ではTc類と凹基式b類、本ノ木は凹基式b類、卯ノ木は凹基式b類、星光山荘BではTc類と凹基式b類をそれぞれ主体とする。室谷では平基式c類を主体とする。

b. 東海・近畿地方

東海・近畿地方では、ほとんどの遺跡で木葉形尖頭器と有舌尖頭器が組成する。また、これに石鎌が伴う遺跡も多い。対象とした遺跡と主な出土遺物については、表2の通りである。

各遺跡の主体となる狩猟具の長さと幅の平均値はグラフに示した通りである（図5～図8）。

遺跡ごとに整理すると、Ab類を主体とする遺跡は葛原沢、品野西、酒呑ジュリンナ、高皿、萩平A、宮行政区、宮ノ前である。葛原沢ではTb類と凹基式b類、品野西や高皿、萩

表2 東海・近畿地方の遺跡と主な出土遺物

器種 遺跡名	木葉形 尖頭器	有舌 尖頭器	石鎌	搔器	削器	石斧	土器
尾壺	○	○	○	○	△	○	
大鹿窪	○	○	○	○	○		隆線、爪形、押圧
葛原沢	○	○	○	○	○	○	隆線、押圧
仲道A		△	○	○			押圧、回転
品野西	○	○		○	△	△	
酒呑 ジュリンナ	○	○	○	○	○	△	隆線
萩平A	○	○		○	○		
宮西 愛知学院区	○	○	○	○	○	○	隆線
宮西 行政区	○	○	○	○	○		隆線
上海上 初屋野	△	○	○	△	△	○	
寺田・ 日野I	○	○	○	○	△	○	隆線
枕の湖	△	△	○	○	○		爪形、表裏
宮ノ前	○	○	○	○	○	△	隆線、爪形、表裏
粥見井尻			○	△		△(石斧?)	隆線、爪形、無文
高皿	○	○	△	○	△	○	爪形
上津大片刈	○	○	○	○	○	△	爪形、押圧
北野 ウチカタビロ	△	△	○	△	△		隆線
桐山和田	○	○	○	○	○	△	隆線、無文、斜格子
まるやま	○	△	○	○	○	△	

○ 5点以上、○ 5～3点、△ 2～1点

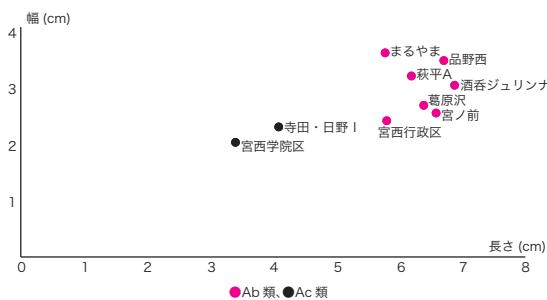


図5 A類の長さと幅の平均値

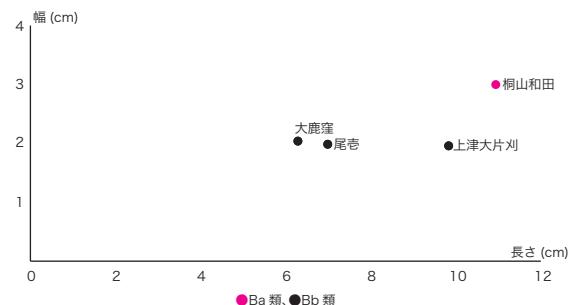


図6 B類の長さと幅の平均値

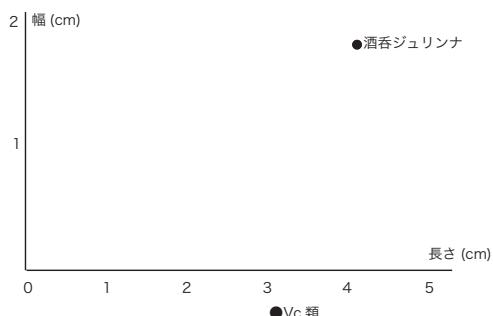


図7 V類の長さと幅の平均値

平Aでは、Tb類、酒呑ジュリンナは、Vc類と凹基式b類、宮西行政区ではTc類と凹基式b類、宮ノ前は、Tc類と平基式b類、まるやまではTb類と凹基式c類を主体的に組成する。Ac類を主体とするのは寺田・日野Iと宮西愛知学院区である。また、寺田・日野IではTc類と平基式c類、宮西愛知学院区ではTc類と凹基式c類も主体的に組成する。Ba類を主体とする遺跡は、桐山和田で、Tb類と平基式c類も主体的に組成する。Bb類を主体とする尾壳、上津大片刈ではTb類と凹基式b類を主体的に組成する。大鹿窪ではTc類と凹基式b類を主体的に組成する。尖頭器類を組成しない遺跡としては、粥見井尻、仲道Aがある。仲道Aでは凹基式b類、粥見井尻では凹基式c類を主体的に組成する。

4. 編年試案

筆者は以前、東海地方の草創期中葉の石器群の編年を試みた経緯がある(田中2017)。しかし、信越地方との比較や近畿地方も含めた編年となると、中葉だけの細別を行ったところで、あまり意味をなさないと考えた。その結果、草

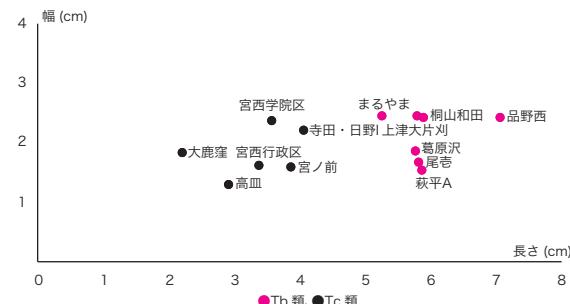


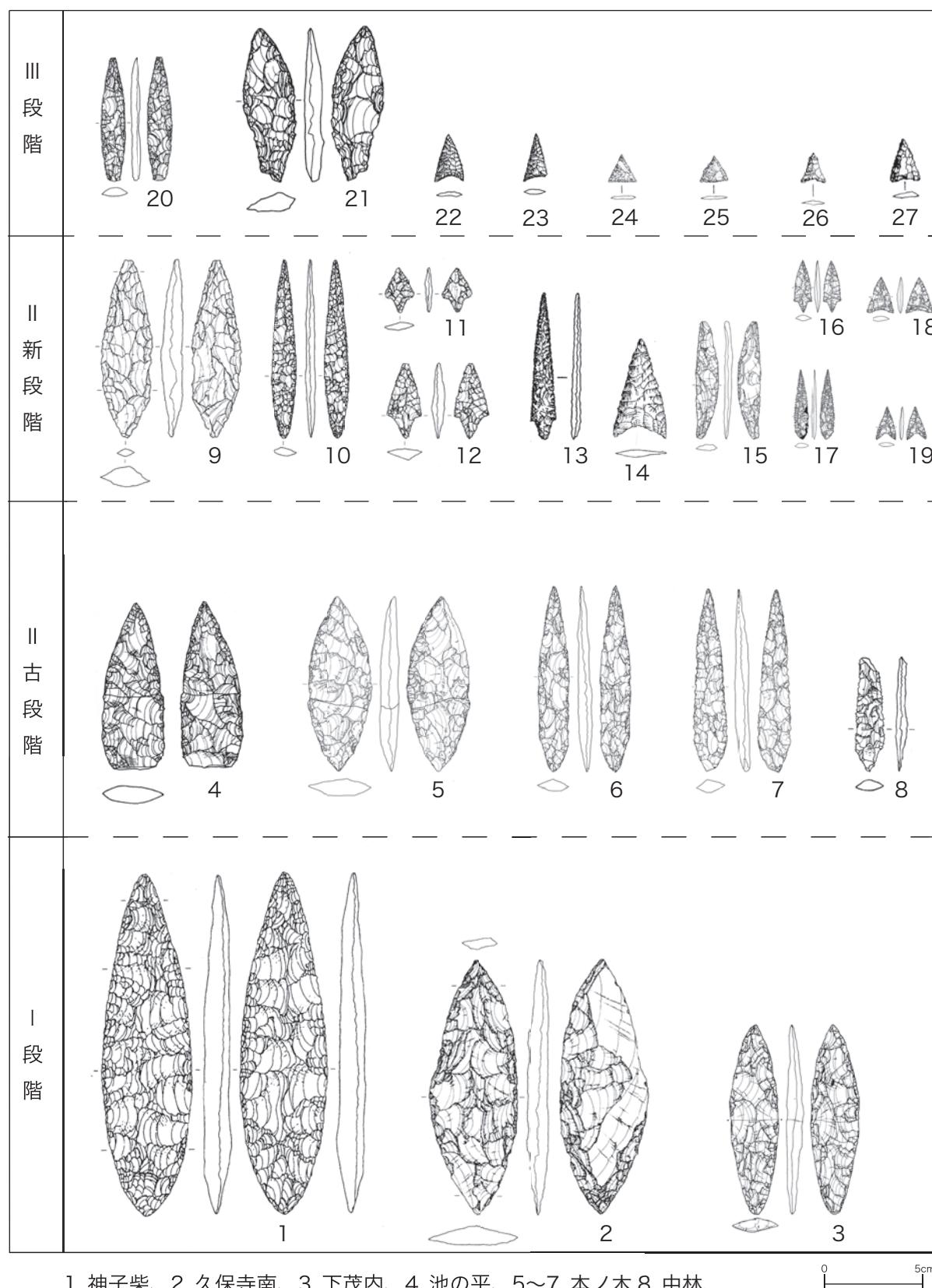
図8 T類の長さと幅の平均値

創期を狩猟具の変遷からI～III段階に大別し、大まかな編年を試みる。

I段階を大形のいわゆる神子柴型尖頭器が狩猟具の主体を示す段階で、II段階が有舌尖頭器が主体となる段階、III段階は石鏃が主体的に組成するようになる段階とする。これを踏まえて、信越地方と東海・近畿地方の編年を試案し、その後、比較検討し、草創期の編年に昇華させていきたい。

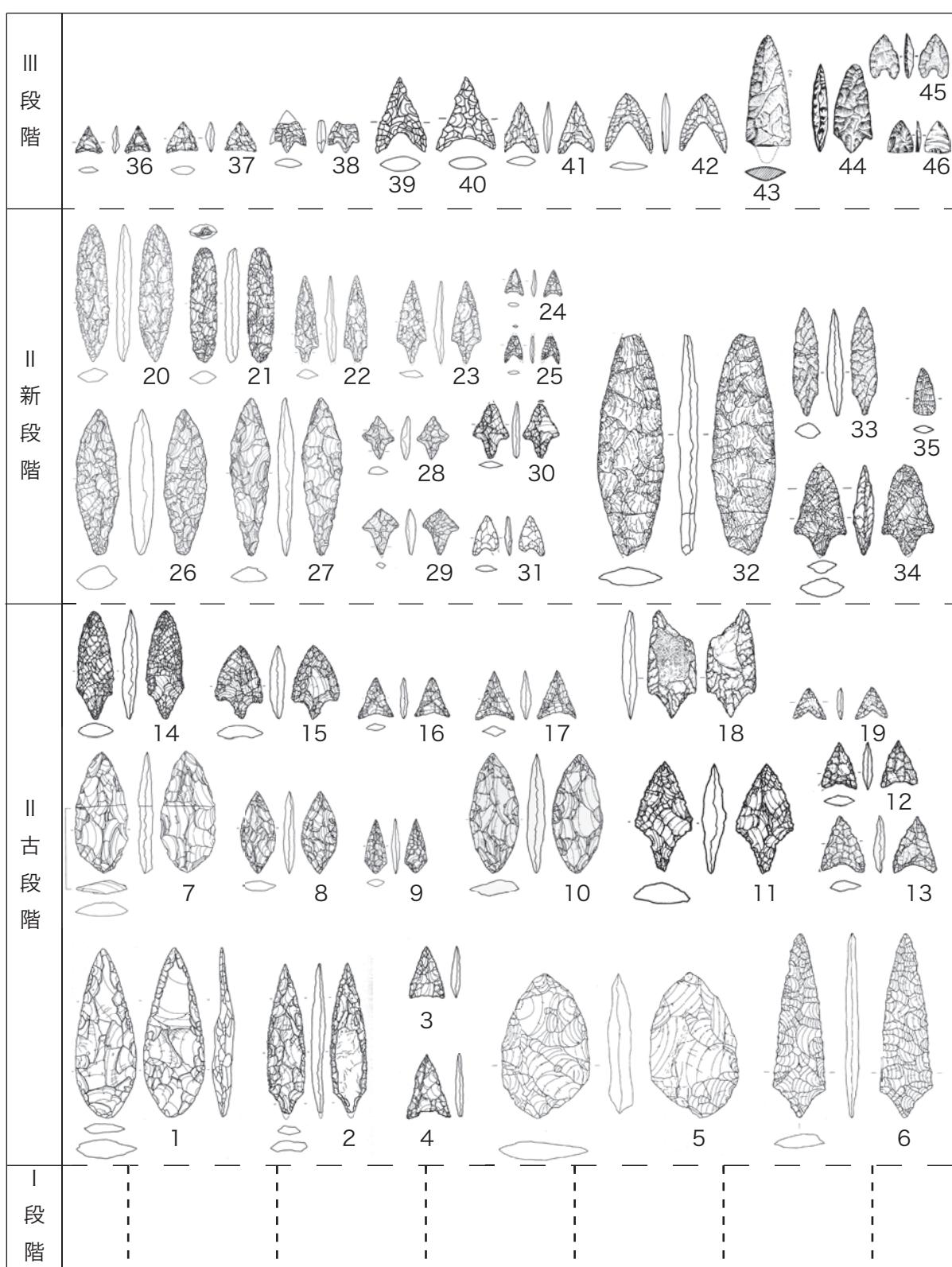
信越地方のI段階は、唐沢B、久保寺南、下茂内、神子柴が該当する。これらの遺跡はA類を主体としており、有舌尖頭器や石鏃を組成していない。その他、石刃を素材とする搔器や削器などが組成している。また、久保寺南では矢柄研磨器も組成している。この段階の特徴はAa類を中心に組成することである。この点は他の段階にはない特徴であろう(図9)。

II段階は池の平、小瀬が沢、星光山荘B、中林、仲町、本ノ木が該当する。この段階は新古の2段階に細別出来る。II古段階は池の平のようにAb類を主体とする遺跡と中林や本ノ木などV類やB類を主体とする遺跡がある。また、搔器は拇指状や円形がみられ、抉入削器も組成する。II新段階はB類やT類を組成する小瀬が沢や星



1. 神子柴、2. 久保寺南、3. 下茂内、4. 池の平、5~7. 本ノ木 8. 中林、
9~12. 星光山荘 B、13・14. 小瀬が沢 15~19. 仲町、20~23. 卯ノ木、24~27. 室谷

図9 信越地方における狩猟具の変遷



1~4. 葛原沢、5・6. 品野西、7~9. 酒呑ジュリンナ、10~13. 宮西学院区、14~

17. 宮西行政区、18・19. まるやま、20~25. 尾堀、26~31. 大鹿窪、32~35. 寺

田・日野Ⅰ、36・37. 粥見井尻、38~42. 仲道A、43~46. 植の湖



図 10 東海地方における狩猟具の変遷

光山荘 B、仲町である。仲町では Tb 類を主体とし、それ以外の遺跡では Tc 類を主体とすることから、仲町の方が若干、古くなる可能性があるが、この段階の所産とする。これらの遺跡は凹基式の石鏃や円形搔器もそれに伴う。

III段階は卯ノ木、室谷である。これらの遺跡では、木葉形尖頭器や有舌尖頭器が僅かしか出土しておらず、石鏃が主体をなす。その形態は、それまでの凹基式主体の段階から、平基式が主体を示すようになる。また、円形搔器や抉入削器も引き続き組成するが、この段階で、室谷のようにほぼ全磨製の石斧が登場する。この段階から、草創期特有の局部磨製石斧はなくなり、より縄文的なほぼ全磨製の石斧に変化していくようである。

一方、東海・近畿地方では、I段階に比定される明確な遺跡は明らかではない(図10)。近年、当センターで発掘調査がおこなわれた、愛知県川向東貝津遺跡で出土した、木葉形尖頭器の一群众がこの段階に該当する可能性があるが、現状は可能性に留めておく(愛知県埋蔵文化財センター 2016)。

II段階は信越地方同様、新古2段階に細別可能である。II古段階は北野ウチカタビロ、葛原沢、品野西、酒呑ジュリンナ、高皿、萩平A、初屋野、宮西愛知学院区、宮西行政区、宮ノ前、まるやまである。これらの遺跡では、Ab 類と Tb 類、Tc 類、Vc 類を主体とする。これらに伴う石鏃は、信越地方同様、凹基式を主体としたもので、平基式もあるが、少量にとどまっている。また、拇指状や円形の搔器、局部磨製石斧がこれらに伴う遺跡が多数である。II新段階は尾壳、大鹿窪、上津大片刈、桐山和田、寺田・日野 I が該当する。これらの遺跡では、Ba 類と Bb 類、Tb 類と Tc 類を主体としている。II古段階と異なる点は、A 類ではなく B 類を主体とすることであろう。また、上津大片刈では草創期に特徴的な局部磨製石斧ではなく、より縄文的な局部磨製石斧を組成していることを考えると、III段階により近い位置にあるかも知れない。

III段階は、仲道 A、樅の湖、粥見井尻といった石鏃主体の遺跡である。これらの遺跡では、木葉形尖頭器や有舌尖頭器が明確に確認できな

い。仲道 A や樅の湖では木葉形尖頭器や有舌尖頭器が認められるが、単独出土や破損であるため、共伴するかどうか不明であるが、この段階の残存要素として考えてもよいかもしれない。それ以外の石器に関しては、この段階以前にみられた円形搔器は組成するが、抉入削器や局部磨製石斧が組成から抜けるようである。

以上、信越地方と東海・近畿地方の編年を構築してみたが、ここで、本論文の目的でもある編年の比較をしてみたい(図9・図10)。まず、I段階を比較してみると、信越地方では Aa 類を主体としており、有舌尖頭器や石鏃を組成していないことが分かる。また、石刃製の搔器や局部磨製石斧など、神子柴・長者久保文化の特徴が大いに認められる。東海・近畿地方では、この段階の資料がなく、様相が明らかではないが、後続のII段階を考慮すると、信越地方のような神子柴・長者久保文化ではなく、東海・近畿地方独自の A 類を主体とした文化が想定される。その理由として、II段階で有舌尖頭器が組成するようになるが、A 類の木葉形尖頭器は、安定的に組成し、有舌尖頭器だけの遺跡が存在しないことからも、A 類を主体とした文化が有舌尖頭器を取り入れた可能性が高い。

II古段階では、中林や本ノ木のように、A 類もあるが、B 類が主体を占めるようになる。また、この段階から V 類の有舌尖頭器が認められるようになる。しかし、東海・近畿地方では、木葉形尖頭器は A 類を主体とし、有舌尖頭器では、T 類や V 類といった形態がすでに存在し、石鏃もこれらに伴っている。この点が、かなり異なった様相を示しているが、のちのII新段階は B 類を主体とする点や、Tc 類を組成するなど、似たような様相を示している。これらの点から、信越地方と東海・近畿地方のII古段階は先後関係で捉えることも可能かもしれないが、有舌尖頭器が主体となる段階として同列と認識しておきたい。

III段階はどちらの地方も共に石鏃が主体となり、木葉形尖頭器や有舌尖頭器をほとんど組成しなくなる。そして、それ以前の段階に認められていた神子柴・長者久保文化の影響は認められなくなる。この段階から、両地方ともより縄文的な石器群へと移行していくようである。

5.まとめ

以上が本論文の結論である（図9・10）。最後に、この編年から見えてきた、新旧関係以外の要素についても触れ、まとめにかえたい。

まず、東海・近畿地方にも、神子柴・長者久保文化の影響を認めることが出来る。しかし、信越地方に見られるような大形の木葉形尖頭器や局部磨製石斧、石刃を伴うような遺跡はなく、局部磨製石斧という一要素として見受けられる。その遺跡は、品野西、酒呑ジュリンナ、寺田・日野I、初屋野、宮ノ前である。これらの遺跡では、局部磨製石斧の他に、中形の木葉形尖頭器や、有舌尖頭器、石鎌を伴っている。中形の木葉形尖頭器はこの地方の特色として、上記以外の遺跡からでも広く一般的に認められる。このことから、神子柴・長者久保文化の影響は局部磨製石斧にのみ認められる。その段階は、II古段階からII新段階である。この段階は信越地方でも神子柴・長者久保文化が希薄になり、局部磨製石斧が要素として残る段階である。このことから、東海・近畿地方に純粋な神子柴・長者久保文化は存在せず、局部磨製石斧という一要素として認められるということに説明が付きそうである。つまり、I段階には広がっていなかった神子柴・長者久保文化が、II古段階では希薄となり、局部磨製石斧という形で東海・近畿地方に受け入れられ、II新段階でも続いていたのであろう。これが、東海・近畿地方のI段階に神子柴・長者久保文化が認められない理由である。

有舌尖頭器に関して、II新段階で「花見山型」と呼称される十字状の小形なものが信越地方では星光山荘Bなどに見られるようになる。しかし、東海・近畿地方では静岡県に限られるようである。よって、花見山型の西限が静岡県である可能性が高い。これについては様々な要因が考えられるが、黒曜石の流通とも関連しているかもしれない。それは、東海・近畿地方では、III段階までは黒曜石がほとんど利用されていない。一方、静岡県では積極的に利用されていた。単に、産地の問題かもしれないが、静岡県では積極的に利用されていた黒曜石が愛知県以西に

ほとんど入ってきていないということは、ものの往来などがなかった可能性がある。そのような要因もあったかもしれない。

石鎌に関しては、III段階になると、木葉形尖頭器や有舌尖頭器がほとんど認められなくなる。その代わりに、石鎌が圧倒的に多くなる。II新段階までは木葉形尖頭器や有舌尖頭器を上回ることがなかったが、この段階では逆転する。ここにそれまでの文化との大きな転換点があったと考えられる。

今後は、編年で見えてきた、各段階の特色などを掘り下げ、型式変化以外の要素も取り上げ、東海・近畿地方の草創期を明らかにしていきたい。

本論文を執筆するにあたり、大学生時代の恩師である白石浩之先生には、多大なご教授を賜った。また、長田友也氏、加藤悠雅氏、川合剛氏、田部剛士氏には貴重なご意見を賜った。記して感謝する次第である。

参考文献・報告書

- 愛知県埋蔵文化財センター 2016「川向東貝津遺跡」『年報』平成 28 年度
- 安達厚三 1969「萩平遺跡 A 地点第 2 次発掘調査報告」新城市誌資料 IX
- 安達厚三 1983「萩平遺跡」日本の旧石器文化第 2 卷遺跡と遺物(上)
- 池谷信之 2001「葛原沢第IV遺跡(a・b区)」『沼津市文化財調査報告書』第 77 集
- 池谷信之・北佳奈子 2008「尾堀遺跡」『沼津市文化財調査報告書』第 94 集
- 漆畠 稔 1986「仲道 A 遺跡」大仁町埋蔵文化財調査報告第 9 集
- 大參義一 1970「酒呑ジュリンナ遺跡(2)」名古屋大学文学部研究論集 L
- 岡本東三 1979「神子柴・長者久保文化について」『研究論集 V』奈良国立文化財研究所
- 岡本東三 2018「本ノ木遺跡の原風景－失われた時を求めて－」『旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流－研究の視点－』白石浩之編
- 岡本東三・佐藤雅一・渋谷賢太郎・久保田健太郎 2016「本ノ木遺跡第一次・二次発掘調査報告書」『津南町文化財調査報告第 70 号』
- 岡本直久・青木 修・佐野 元 1997「品野西遺跡」『瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第 13 集』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 川合 剛 2002「近畿・東海地方の有舌尖頭器」『縄文時代の石器一関西の縄文草創期・早期一』第 4 回関西縄文文化研究会
- 栗島義明 1988「神子柴文化をめぐる諸問題・先土器・縄文の画期をめぐる問題(一)」『研究紀要』4 号
- 紅村 弘・原 寛 1974「枕の湖遺跡」坂下町教育委員会
- 小金澤保 2003「大鹿窪遺跡」『大鹿窪遺跡・窪 B 遺跡(遺構編)』
- 小金澤保 2006「大鹿窪遺跡」『大鹿窪遺跡・窪 B 遺跡(遺物編)』
- 小嶋準一・岩田 熱・吉朝則富 2015「岐阜県荘川町海上の神子柴系石器群」『旧石器考古学』80
- 小林達雄 1967「長野県西筑摩群開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」『信濃』19-4
- 近藤尚義 1992「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 I- 佐久市その 1- 下茂内遺跡」長野県教育委員会
- 佐藤雅一・笠井洋祐 2001「久保寺南遺跡」新潟県魚沼市中里村教育委員会
- 佐藤雅一・古谷雅彦 1999「卯ノ木遺跡」『卯ノ木遺跡第 2 次調査報告書個人開発に伴う遺跡確認試掘調査一』津南町教育委員会
- 白石浩之 1976「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について」(上)・(下)『考古学ジャーナル』No.126、127
- 白石浩之ほか 2007『愛知県田原市宮西遺跡の発掘記録』I~5 愛知学院大学文学部歴史学科
- 澄田正一・岩野見司・早川正一 1962「川路萩平(下の段)遺跡」『新城市誌資料 II』
- 澄田正一・大參義一 1967「酒呑ジュリンナ遺跡—わが国土器文化発生期の一様相一」名古屋大学文学部研究論集 XLIV
- 芹沢長介 1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」日本文化研究所研究報告第二集
- 田中 良 2017「東海地方における縄文時代草創期中葉の石器群について」『東海石器研究』第 7 号
- 田原市教育委員会 2012「宮西遺跡(I)、(II)」田原市埋蔵文化財調査報告書第 5 集、第 9 集
- 田部剛士 2011「押型文前半期における石器の様相一大和高原の層位的傾向からー」『押型文土器期の諸相』第 12 回関西縄文文化研究会
- 田部剛士 2013「東海・近畿地方における石器群の変遷—縄文時代草創期から早期初頭ー」第 21 回考古学研究会東海例会
- 土屋 積・中島英子 2000「星光山荘 B」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 16 信濃町内その 2』長野県文化振興財団・長野県埋蔵文化財センター
- 鶴田典昭ほか編 2004『一般国道 18 号埋蔵文化財発掘調査報告 3- 信濃町内その 3- 仲町遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 中川 明・前川明男 1997「粥見井尻遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告』156
- 中村孝三郎 1960「縄文時代早期小瀬が沢洞窟」長岡市科学博物館研究調査報告 3
- 中村孝三郎 1963「卯ノ木押型文遺跡」長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小方 保 1964「室谷洞窟」長岡市立科学博物館
- 奈良県立橿原考古学研究所 2002「桐山和田遺跡」『奈良県文化財調査報告書』第 91 集
- 早川正一ほか 1998「宮ノ前遺跡(I)」「宮ノ前遺跡発掘調査報告書」宮川村教育委員会
- 林 茂樹 1959「長野県上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡発掘調査覚書」『伊那路』3-3
- 林 茂樹 2008「神子柴」上伊那考古学会
- 兵庫県教育委員会 1998「まるやま遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第 178 冊
- 増子康眞・久野敏幸・荒川弘道 1987「東海地方有舌尖頭器石器群の編年一名古屋市北沢遺跡をもとにー」古代人 48 号
- 松田真一 1991「布目川流域の遺跡 6」『奈良県遺跡調査概報 1990 年度』第一分冊
- 松田真一 1998「近畿地方における縄文時代草創期の編年と様相」『奈良県橿原考古学研究所論集』13
- 森嶋 稔 1967「長野県長野市信田町上和沢出土の尖頭器」『信濃』19-4
- 森嶋 稔 1968「神子柴型石斧をめぐっての試論」『信濃』20-4
- 森嶋 稔 1970「神子柴型石斧をめぐっての再論」『信濃』22-10
- 森嶋 稔 1998「唐沢 B 遺跡」千曲川水系古代文化研究所
- 八千穂村池の平遺跡発掘調査団 1986「大反田遺跡」『池の平遺跡群』
- 山内清男 1969「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』224
- 山内清男・佐藤達夫 1962「縄紋土器の古さ」『科学読売』14-2
- 山内清男・佐藤達夫 1967「下北の無土器文化」『下北—自然・文化・社会ー』
- 米川仁一編 2003『上津大片刈遺跡』奈良県立橿原考古学研究所